

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20820015
 研究課題名（和文） 中世初期南アジア農村社会における権力と支配
 研究課題名（英文） Power and Domination in the Rural Society of Early Medieval South Asia
 研究代表者
 古井 龍介（FURUI RYOSUKE）
 東京大学・東洋文化研究所・准教授
 研究者番号：60511483

研究成果の概要（和文）：当研究により、中世初期ベンガル各下位地域間／内の環境・歴史的経緯の差による農業発展および土地保有層の権力の在り方の相違が明らかになるとともに、彼らや王権を含む様々な権力・社会集団の相互作用と交渉の過程として中世初期南アジアにおける社会変化を捉える展望が得られた。加えて未公表のもの1点を含む4点のパラ朝銅板文書が校訂され、現地調査を通して多くの未公表碑文史料が撮影された。

研究成果の概要（英文）：This research revealed the diversity of the agrarian development and the power structure of landed class due to the difference in ecology and historical process among/within sub-regions of early medieval Bengal. It also provided a prospect to understand the social change in early medieval South Asia as a process of interaction and negotiation among various powers and social groups including the aforementioned class and the kingship. Apart from that, the four Pala copper plate inscriptions including one unpublished were edited and the photographs of unpublished inscriptions were taken through the fieldworks.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,330,000 | 399,000 | 1,729,000 |
| 2009年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,530,000 | 759,000 | 3,289,000 |

研究分野：南アジア古代・中世初期史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：①南アジア ②ベンガル ③中世初期 ④碑文学 ⑤農村社会

1. 研究開始当初の背景

南アジア古代史研究において、6－12世紀、中世初期の歴史変化の解釈は重大な争点であった。議論により明らかになったのは前近代南アジアにおける多様な社会の共時的存

在とそれらの相互作用の過程としての歴史理解の重要性、そして特異な環境を持つ南アジア各地域のレベルでその過程を研究することの有効性であった。このような研究動向の中、研究代表者も中世初期ベンガルの農村

社会とその内部の権力関係を研究してきた。そこでは農村有力者の台頭と在地支配者層への成長が重要な歴史過程として捉えられた。その後彼らの権力基盤としての農村における知について研究を進めたが、その過程で彼らの経済的・物理的権力基盤を考慮する必要性が実感され、当研究の着想にいたった。

2. 研究の目的

当研究は、中世初期南アジア、特にベンガル地域の農村において、土地を中心とする経済的資源へのアクセスと知的・文化的ヘゲモニー、そしてそれらの相互作用がいかにか在地権力を構築・規定するのか、またこのような権力による農村社会の支配がどのように確立・維持され、また変化していくのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

碑文史料および同時代文献史料の読解を通して土地制度および土地保有態様の変化と知識・リテラシーの在り方について調査するとともに、西ベンガルおよびバングラデシュ各地での現地調査により未公表の碑文のフォトデータを収集し、それらの校訂・公表を行い、一次史料の拡充を図る。またより深い社会的文脈理解のため、近代ベンガルの農業関連資料を調査する。

4. 研究成果

当研究の主な成果としては以下の3点が挙げられる。

(1) ベンガル内各下位地域における農業の展開とそれに伴う権力関係の変化の把握

近代ベンガルの農業関連資料の読解・調査によるベンガル内各下位地域（西ベンガル＝ラーダ、北ベンガル＝ヴァレーンドラ、南ベンガル＝ヴァンガ、東ベンガル＝サマタタ、シュリーハッタ、ハリケーラ）の環境およびそれによる農業形態の理解に基づき、銅板寄進文書を中心とする碑文史料を再読・再解釈した結果、それらにおける農業拡大・発展の過程と、それに伴う在地権力関係の変化が明らかとなった。

ベンガルにおける農業はまずデルタ周辺の旧沖積地に展開し、その後ベンガルデルタの低地に拡大した。最初期の農業集落址は西ベンガルの比較的標高の高い、アジャイ・ダーモーダル両河畔の低地に確認される。それらは紀元前2千年紀半ば前後の金石併用文化期・原史期に属する。紀元前1千年紀半ばの初期歴史時代には西ベンガルのガンジス川流域および北ベンガルへと農業が展開し、紀元後6世紀以降には南ベンガルおよび東ベンガルのデルタへの農業拡大が本格化した。

このような農業拡大の過程に対応して、5世紀前半から6世紀半ばに属する最初期の銅板文書は主にグプタ朝支配下の北ベンガルに関連している。これらは地方行政組織により発行され、個人による宗教的施与のための荒蕪地購入を記録した土地売買文書であるが、そこからは、家族労働に基づく小農層による経営という農業形態と、有力小農層の集合による在地の重要事項決定過程への参画が読み取られる。有力小農層は農村共同体の代表者として地方行政機構を通して国家と交渉する一方で、国家との関わりを通じて農村における自らの地位を強化した。その背景には、小農層による土地保有が確立する一方で共同体的制約も残存し、また国家による土地支配への主張も進行していたという状況がある。このような状況において、宗教施設への荒蕪地施与とその実質的な耕作権の獲得は、有力小農層が正当性をもって農業経営を拡大し、共同体的制約を克服する手段であった。しかし、共同体の代表者としての立場と家族労働による小農の経営に依存する彼らの農業拡大には限界があり、その克服は次の時代における土地保有有力者層の台頭を待つこととなった。

6世紀半ばから8世紀にかけて、南ベンガルおよび東ベンガルにおいて階層的権力構造を持つ地方的政治権力の形成と農業拡大が顕著となった。後者はガンジス川下流域の低湿地および東部の森林の開拓によるものであり、小農層による家族労働を超える労働力の動員が必要であった。南ベンガルにおいてそれを可能としたのは土地保有有力者層の台頭であった。彼らは土地保有の拡大と書記などの在地識字層との協力により農村における支配的地位を確立し、小農層を在地の重要事項決定過程から排除するとともに、地方国家とそれを構成する政治権力と対峙した。その過程で地方国家はその存在と支配を強化し、農村有力者層の上層は従属政治権力として包含されることとなった。

同時代の東ベンガルにおいては、王権に従属して一定地域を支配する従属支配者が農業拡大の主体となったが、当該下位地域内各地方において環境および歴史的経緯の違いにより農業発展の段階・速度が異なることに伴い、彼らの活動と上位政治権力との関係も多様であった。河川流域の比較的開発が早かった地方においては王権による比較的強力な支配の下、土地に対する重層的な権利が出現した。すなわち、耕作者の上位に土地からの収穫の一定割合に対する権利を有する層が現れ、従属支配者層も王族・宗教施設とともにそれに含まれていた。このような地方においては土地に対する上位の権利を仏教僧院へ寄進する傾向が認められる。一方、開発の遅れた奥地では王権に名目上従属する支

配者層により森林の開発が進められたが、その際には森林内に神殿を建立し、それに属する多数のブラーフマナらへ大規模な寄進を行うという形態が取られた。そこには、ブラフマニカルな神格の権威に拠って森林およびそこに居住する狩猟採集民の領域の蚕食を正当化する意図が認められる。以上に加え、中間段階と呼ぶべき事例も存在し、そこではやや開発の進んだ地域における仏教僧院および多数のブラーフマナらへの寄進が同時に行われた。

この時代の後半より銅板寄進文書の発行は王権の専権事項となり、対立・緊張関係の構図も農村有力者対外部政治権力から、従属支配者層対王権へと推移していった。

9世紀にはパーラ朝により北ベンガルおよび西ベンガルが統一されたが、その支配の初期には従属支配者層による活発な活動が見られた。早くから農業が発達した北ベンガルにおいては前時代の南ベンガル同様の土地保有有力者層の台頭が見られ、農村の他の社会集団に対する彼らの優位は継続した。しかし、王権に従属しつつ農村社会への支配を強めていた従属支配者層を前に、外部の政治権力に対する彼らの相対的地位は低下していった。従属支配者層の活動として顕著なのが、仏教僧院などの宗教施設の建立と、王権に対するそれらへの村落施与の申請である。宗教施設の建立は在地におけるある程度の支配の確立を条件とするが、自らも運営に携わる宗教施設の建立とそれへの村落からの収入の集積は、彼ら従属支配者層の在地支配を強化した。また、村落を王権の干渉外の寄進地とすることで、彼らによる正当な手段での王権の蚕食を可能とした。しかし、10世紀以降王権が支配を強化していくに従ってこのような事例は見られなくなった。

(2) 識字エリート層のネットワーク形成と地域アイデンティティーの基盤構築の理解

農業発展に伴い、土地の主な被与者であるブラーフマナらのベンガル内各下位地域への移住・拡散が見られた。そこに認められるのは、彼らによるネットワークの形成と在地での権威の確立である。この傾向は9世紀半ば以降顕著となるが、それはまず被与者のアイデンティティーの精緻化として現れた。この時期以降の銅板寄進文書には彼らの学識・系譜が詳細に言及され、加えて彼らの家系の起源地、彼らの居住地も明示されるようになった。そこには、農村に在住して農業に携わる他のブラーフマナ層との差別化への意図とともに、起源地・居住地と被与村落をつなぐ彼らのネットワークの存在が類推される。このようなネットワークは政治権力による施与のみならず、自発的な移住によっても形成された。

ネットワークの構築はその節となる中心集落の形成を伴った。10世紀以降の西ベンガルおよび北ベンガルにおいては、北インド中心部の著名なブラーフマナ集落の名を冠した諸村落が現れた。これらはブラーフマナおよび他の識字エリート層の活動の中心として彼らのネットワークの節となり、著名なブラーフマナの家系を輩出した。これら中心集落を節とするネットワークは西ベンガル・北ベンガルのそれぞれで展開したが、その結果、ラーディーヤ、ヴァーレーンドラという各下位地域への所属に基づくブラーフマナらのアイデンティティーが形成されるにいたった。彼らはブラーフマナに基づく新たな儀礼の専門家およびブラフマニズムに基づく社会秩序の保持者として王権との関わりを強め、また土地施与を通して農村社会での存在を増していたため、彼らによる地域アイデンティティーの形成は、その後展開するベンガル内下位地域の地域アイデンティティー形成の基盤となった。

(3) 銅板文書の校訂による一次史料の拡充と未公表史料の収集

当研究では以上に加え、未公表のもの1点を含む4点のパーラ朝銅板文書を校訂した。未公表の1点は従属支配者による仏教僧院建立と村落施与申請を記録したもので、上に論じた彼らの活動を示す史料として重要である。残りの3点は校訂の不十分な文書の再校訂であるが、これらにおいては村落からの収入が特定の貨幣価値に換算されて記されている。これは12世紀半ば以降セーナ朝支配下で一般化する制度の先取りであり、パーラ朝王権による支配強化の意図と方策の一端を示すものである。

また、インド西ベンガル州各県およびビハール州のパトナ、ウッタールプラデーシュ州のヴァーラーナシーと、バングラデシュのダカ、ラジシャヒ、ボグラ、ダモイルハト、ジョイプルハトにおける現地調査および博物館所蔵品調査により多くの未公表碑文史料の調査・撮影を行い、またそれらが出土した遺跡の環境・状況を把握した。博物館所蔵品の調査はベルリンのアジア美術博物館およびロンドンの大英博物館でも行った。

以上の研究成果により、中世初期ベンガル農村社会における権力関係の変化が、各下位地域の環境および歴史的経緯の差異による農業発展過程の相違との関わりで捉えられた。ここでは、農村土地保有有力者層、従属支配者層、王権、ブラーフマナ層など、異なる権力基盤および物理・文化資本を有する諸集団の相互作用・交渉の結果としての中世初期ベンガル史の理解が提示された。それらの一部は論文・口頭発表として公表済であるが、

全体のモノグラフとしての刊行・公表は、中世初期南アジア史に関する議論に新たな視角を提供することが期待される。また、当研究により収集された諸未公表碑文史料の校訂は今後の研究で進めることになるが、それら新史料による一次史料の拡充はベンガル中世初期史の今後の展開に大いに貢献するとともに、最終的には既知の碑文の再校訂を含めた碑文集の編纂に結実するものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Furui, Ryosuke, Biyala Copper Plate Inscription of Mahipala I, Pratna Samiksha, 査読無, 13, 2010 (採録決定済)
- ② 古井龍介、ジャガッジーバンプル銅板文書とナンダディールギー僧院址、インド考古研究、査読有、31号、2010 (採録決定済)
- ③ Furui, Ryosuke, Re-reading Two Copper Plate Inscriptions of Gopala II, Year 4, G. J. M. Mevissen and A. Banerjee (eds), Prajnadhara: Essays on Asian Art, History, Epigraphy and Culture in Honour of Gouriswar Bhattacharya, New Delhi: Kaveri Books, 査読無, 2009, pp.319-330
- ④ Furui, Ryosuke, A New Copper Plate Inscription of Gopala II, South Asian Studies, 査読有, 24, 2008, pp.67-75

[学会発表] (計2件)

- ① Furui, Ryosuke, Sub-regional Identities and Cultural Hegemony in Early Medieval Bengal, International Conference on Region Formation in Contemporary South Asia, 2009年11月27日, The University of Delhi
- ② Furui, Ryosuke, Agrarian Expansion and Local Power Relation in the Seventh and Eighth Century East Bengal: A Study on Copper Plate Inscriptions, The 14th World Sanskrit Conference, 2009年9月3日, 京都大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古井 龍介 (FURUI RYOSUKE)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号: 60511483

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: